IS転生-五反田家の場合-

ノヴァ鵜詐欺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ転生－五反田家の場合－

【Ｎコード】
Ｎ０５７２Ｔ

【作者名】
ノヴァ鵜詐欺

【あらすじ】
なぜか生まれてすぐに意識があり、前世の記憶まである五反田　零
彼がどうやってＩＳ関わってどうなっていくのか
そんなお話

プロローグ―零の独白―（前書き）

パソコンが古くて文字打つのも大変ですが、ちょくちょく書いていく予定です

プロローグ－零の独白－

私の名前は五反田　零
どこにでもいるちょっと変わった女の子・・・だったらよかったのに・・・

私には秘密がある
私には前世の記憶というか人格がある
前世での最後の記憶は迫りくるトラック
私は元は男、現在も男。
いろいろ合って一人称は『私』
色々ありすぎてなにから話したらいいか・・・・

私が生まれたのは6年前
五反田家の長男として生まれた
生まれてすぐは大いに混乱したけれど両親のうれしそうな顔、祖父のちょっと赤みの入った厳つい笑顔を見ていて（まぁ、どうでもいいか）となんとなく受け入れていた
しかし、3ヶ月になる頃になるとよく熱が出るようになった
6ヶ月を過ぎる頃には入院、1歳の誕生日は病院で過ごした
両親と祖父は定食屋を営んでいる自営業、いつも誰かしらついていてくれた
嬉しかったけれどいつもなにかに耐えるように苦しそうだった
3歳の頃には母が倒れた、過労らしい
私の見舞いや仕事についに倒れてしまったようだ

私は申し訳なくなる思いと何も出来ない自分が悔しかった
祖父に母の体調を聞いても「お前が気にするこたぁねぇ」と頭を撫でるだけ
本当に無力だった
私は祖父に頼んでパソコンを買ってもらった
日ごろわがままを言わない私の最初で最後のわがまま
祖父は驚いた顔をしていたけど買ってきてくれた
3歳児に与えるにはかなり高価なものだけど、これが無くちゃ始まらない
前世ではプログラムをいじって小銭を稼いでいた。病院ではやることが限られていたので技術書も読み漁った。そのおかげか私の造ったプログラムは低価格だけどそこそこ性能がいいとネットで話題になった
ちなみに、この頃から母は私に「零ちゃんはかわいいのに俺なんていっちゃだめよ？」と一人称を『俺』から『私』へと代えていた
そして、入院費と治療費がある程度稼げるようになって両親と祖父に

「おかあさん、わたしぱそこんでぷろぐらむつくってうってるの。だから、びょういんのおかねはだいじょうぶだからむりしないでね？」

といった。いってしまった。
母は泣き、父は歯を食いしばってなにかに耐え、祖父は怒っていた

「ガキがそんなこといちいち気にすんな！！」

そりゃ3歳児に入院費から治療費まで稼がれたら親としてはくやしいだろう
私は謝ったけどやっぱりお金のことは心配だし、両親に無理はさせたくなかった

結局、私が稼いだお金は入院費と治療費に当てることを了承させたが両親は「ごめんね」と泣いていた
この歳で親を泣かせて悪いと思ったけど個々だけは譲れなかった

5歳ぐらいになると体調も少しづつ良くなって自宅療養に切り替わった
けれどやっぱり外に出れるほど健康というわけでもなかった
だからってわけではないがプログラムの腕はメキメキ上達して最初はイロモノやちょっとしたいたずらに使える程度のプログラムしか作れなかったが、今ではちょっとした企業の下請けなんかもやってたりする
それとうれしいニュースがあった近々兄弟ができるらしい
いいお兄さんにならなきゃね

そして、今目の前にいるのが『五反田　弾』
私の弟だ。かわいい
病弱な私だけどこれからどんどん元気になっていくから一緒に遊んでね？

プロローグ ― 零の独白 ―（後書き）

今回は主人公の独白で回想って感じです

第一話　（前書き）

パソコンが壊れてしまいました
かな打ちしかできない俺にローマ字打ちをしろと？
無理

第一話

零視点

６歳になり弟も生まれた。
私はこれまで色々と両親達に迷惑をかけてきたので弟に繋りっきりの両親を見るとちょっと安心する。

最近では体調も良くなってきているのでたまに公園まで散歩に出かける
公園自体はすぐ近くにあるのだが、如何せん今までの入院＆自宅療養で体力が無い私は近くの公園に行くだけで息が上がってしまう。
公園に行き、ベンチで休んで家に帰るのが日課になっていた。

そんなある日、いつものベンチに知らない子が座っていた。
ムスッとした顔でパソコンをいじっている。別にいつも座っているからと自分の場所だと主張するほど子供ではない私（見た目は６歳児）は一つ横のベンチに座る。いつものベンチは木陰になっているがこっちは日に照らされているので暑い。
ベンチに座ってボヘーとしていると隣の子供がこっちをチラチラみてくる。

「？どうかした？」
「別に」

気になって聞いてみるも機嫌が悪いのか無愛想。
隣にいられるが嫌なんだろうか？

「・・・・暑いならこっち来たらいいのに」

・・・・どうやら私が暑そうにしているのが気になったらしい

「ごめんね？じゃあ失礼して」

ふぅ、やっぱり木陰のほうが楽だね

ふと隣の子のパソコンの画面が見えたが同い年ぐらいの子の使うようなソフトじゃないと思う・・・

「C言語？すごいね、なにかプログラムでも組んでるの？」

そういうと隣の子ががばっとこちらを向く。こわいお

「わかるの？」

「ち、ちょっとはね。プログラム組むのが趣味かな？」

なんだろうこの子、ものすごくキラキラした目で見てくる。

「どんなプログラム？何使ってるの？見せて！！」

テンションがすごく上がって行ってる。・・・あれ？不機嫌は？

それから私が組んだプログラムの紹介や説明していく。

この子すごい。色々と専門用語付きで説明しちゃったけど全部わかってる。

それにプログラムをいじれるように余裕をもって作っているとはいえプログラムの改造案がすごい。

でも、音声認識ソフトもだませる性能の音声ソフトはやりすぎ・・・。

そんなことしていたら夕方になってきていた。そろそろいい時間なので帰るというと超不満ですって顔された。

「大丈夫だよ。明日も来るし多分しばらくはここにくるから」

となんとか宥めて解散となった

すごく個性的な子だったけどいい子だったなぁ・・・・

あっ、名前聞いてないや

第一話　（後書き）

作者はプログラムかけらも組めませんので知識が半端ですのであしからず

第二話

零視点

あれから何度かあっているうちにあの子の名前は「篠ノ之　束」というらしい
歳を聞く限りでは同い年らしい、いつもは公園のベンチで喋っているのだが最近また体調が悪くなってきているのであまり会えなくなっている。

「はぁ、半年ぐらいしか歩いていられないって・・・」

またベッドの上の生活に戻ると思うとまた気が重くなる。
束ちゃんには家の場所は教えているから気が向いたらくるだろう。
日がな一日家にいるのも退屈だ。一日中プログラムを打つのも疲れる。
弟もまだ一歳、まだ遊ぶこともできない。仕方なく通販で色々買ってみる。

・・・・買いすぎたかも。金銭的には余裕だが場所が・・・・

気が向いたら通販で買ったものをいじったり、プログラム打ったりしてしばらく過ごしていたら束ちゃんがきたらしい

2か月ほどあってないが忙しかったか、他の友達と遊んでいたのだろう。
母に頼み部屋に上げてもらう。

・・・・なんかご立腹のようなんですが？

なんかしたっけ？

・・・そういえば突然公園に行かなくなったから？

「・・・なんで公園こなくなったの？」

目を伏せて泣きそうな声で聴いてくる。

やばい

超かわいい。私はドＳなのかもしれない

「体調が悪くなってまたベッドの上の生活に戻っちゃったの。ごめんね？なにかで伝えればよかったのに」

「・・・パソコンのメール・・・」

おぅふ、すっかり失念してました。だって、迷惑メールばっかり来るから使ってないもの

え？それこそプログラム組めばいい？・・・売れそうだよね、今度つくろ

「ごめん！！忘れてた・・・」
「・・・嫌いなったわけじゃない？」
？嫌いになるようなことされた覚えないけど
やっぱりこのぐらいの歳だったら不安なのかな？
ちょいちょいとベッドまで束ちゃんを呼ぶ。
そして、優しくハグ。やっぱり不安なときってひと肌じゃない？
「大丈夫、束ちゃんみたいないいこ嫌いにならないよ」
安心したのかハグ仕返してきた。なにこのかわいい生物

束ちゃんに笑顔が戻り、部屋の改良品や本などの物色や今までのように知識の共有？らしいこと（将来的には私を助手にしてなにか作りたいらしい）をして過ごした

「でねー、ちーちゃんがね」

最近話に出てくるようになったちーちゃんなる人のま話をする束ちゃんの顔は輝いてる。
私も笑顔で話を聞いている。二人はものすごく仲がいいらしい。

「今度来るときはちーちゃんとくるね！！」

帰り際にそういって束ねちゃんが帰って行った

・・・今度二人が来るまでにいろいろおもちゃでも作っておこう

かな？

束視点

今日は零ちゃんの家に行ったら体調が悪いだけらしい
今度はちーちゃんと一緒に行くといったけど、ちーちゃんの家では
弟君が生まれたそうだからしばらくは無理かもしれない。
家にも家族ができそうだし、一人で行くかもしれないけどまぁいいか

零ちゃんにはいろいろ面白いもの見せてもらったし、なにか面白い
物作っていこう☆

第二話（後書き）

文才カモン

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0572t/

IS転生-五反田家の場合-

2011年5月26日22時00分発行